

小説の街で、

③ 「千年旅人」 辻仁成

魂が戻る場 琴ヶ浜に

陸との関係を感じ、海の方へ果てしない物語のはじまりを覚えた」と辻は振り返る。

物語は自殺願望の若者が浜にたどり着くところから始まる。



手伝う。死を物理的にしか受け入れなかった若者は、男が口にする彼岸の存在を否定するが、いつしか、船の修理を手伝うようになる。そして男は死に、海に帰る――。

作品について、辻は「千年を

海とのつながりを持っていた」

坂侑(69)は、ペットボトルやプ

「昔は打ち上げられた木をまきにした。海からは恵みが来たが、今来るのはゴミばかり」



「琴ヶ浜の」水平線を見つめるだけで次々に物語が浮かんだ。人間の魂が戻っていく場所を描くのにぴったりだった。大

男は自分の棺おけとなる難破船を修理し、少女はその修理を

能登には、古代より海から様

せたかない」と話す。



「ニューヨークで脚本を書いた時点では、舞台はまだ、能登と決まっていなかった。映画のスタッフが日本中の海辺を撮影し、その写真の中から、脚本のイメージに合う場所として選ばれた。

暮らす浜辺の民宿に寄せる。そこには、もう一人病魔に侵され

ときれない。

定の地元の高校1年升本庄吾(15)は「昔から続いている行事。自分たちの代では途絶えさせたくない」と話す。

その浜は、そこから死者を送り出すと、魂はまたその地へ戻ると言われていた。

生きる人間はいない。しかし、生きたという記憶は心に豊かな今を焼き付けていく」と表現している。生は儚いが、生きた証しを誰かが伝えることで、魂は

アマメハギを担う青年の多くは地区から出て行ってしまっているが、その日になると集落に帰ってくる。今年も参加する予定の地元の高校1年升本庄吾(15)は「昔から続いている行事。自分たちの代では途絶えさせたくない」と話す。

作品はまず、辻自身が監督を務めた同名映画の脚本として誕生。撮影後、小説として発表された。ニューヨークで脚本を書いた時点では、舞台はまだ、能登と決まっていなかった。映画のスタッフが日本中の海辺を撮影し、その写真の中から、脚本のイメージに合う場所として選ばれた。

99年、豊川悦司主演の映画として全国公開。他に大沢たかお、渡辺美佐子らが出演し、ヴェネツィア国際映画祭・国際批評家週間招待作品。映画の世界を描いた小説「砂を走る船」などを収めた短編集として同年、集英社から単行本出版。02年、同社から文庫本に。映画は、死期を待つ男が中心だが、小説は自殺願望の男を中心に書かれている。

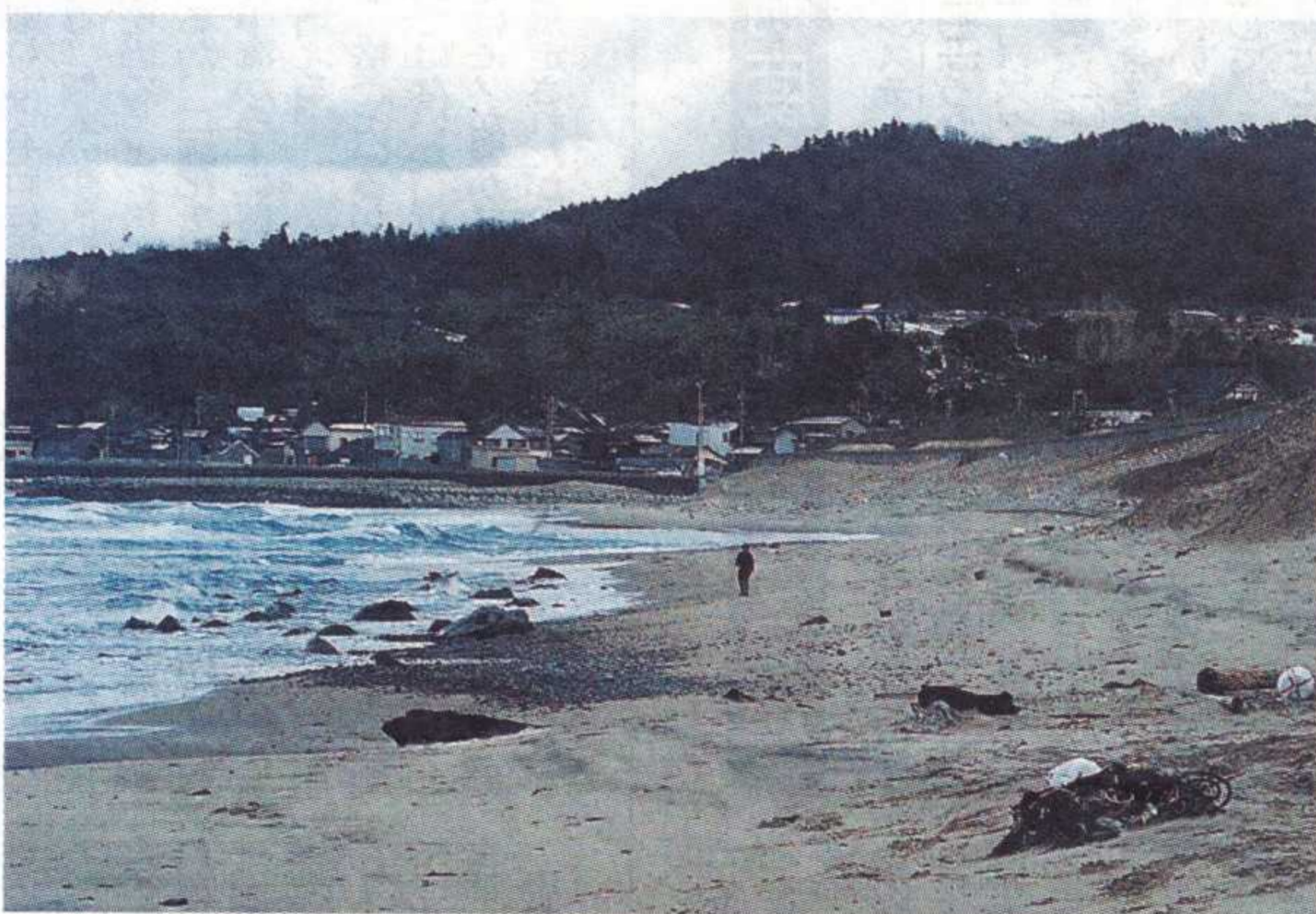
と指摘する。能登に眠る民俗学の巨人折口信天は、そうした風習の一つ、アマメハギを「まれびと信仰」と位置づけた。まれびとは、時を定めて他界から訪れる霊的存在とし、その他界は海の彼方にあると考えられていた、という。

ただ、かつては奥能登一円にあったアマメハギも今は数力所に残るだけだ。門前町皆月地方では1月6日の夜、鬼面などを付け異様な扮装をした青年が家々を回る。

ラスチック製品、壊れた漁具などが散乱した浜を見て寂しそうに言った。宮坂は99年暮れから、03年まで「琴ヶ浜の泣き砂を守る会」の会長を務めた。足を悪くして会長を退くまで、毎日のように浜を歩いてゴミを拾った。かつて、どこを歩いても、「きゅっきゅっ」と鳴いた浜も、今はどこどころで鳴く程度だ。

小説では、少女は浜に打ち上げられる漂流物を集めている。流木や発泡スチロールの残骸、セルロイドの人形などを並べ、「神様からの贈り物」と笑う。エキストラとして映画にも出た宮坂は「私はとてもあのゴミが贈り物とは思えない」と話す。ただ、こう付け加えた。「うまいことは言えませんが、小説にある海の方へのつながり、みたいなものは、なんとなくわかるんだ」

敬称略 (浅見和生)



打ち上げられたゴミが点在する琴ヶ浜＝門前町刃地